

痙性四肢麻痺の後遺症を残した。帰国後1985年1月、上気道症状、高熱と同時に多形浸出性紅斑（EEM）が出現し当科に入院。低ガンマグロブリン血症を認め、IgG 175mg/dl, IgA<5, IgM 18, IgE 9.5IU/ml（RIST）と全てのクラスが低値であった。末梢リンパ球サブセットは、T細胞正常、表面Ig陽性細胞1.4%, Leu 12⁺細胞4.0%とB細胞の著明な減少が認められ、骨髓に形質細胞は見あたらなかった。PHA, ConA, PWMは正常、遅延型過敏反応は保たれていた。EEM発症2ヵ月目にIgG, M, 次いでIgAも上昇し正常化した。B細胞数は平行して増加した。本例はHUS又はEEMに続発した低ガンマグロブリン血症と思われる、発症機序としてlymphoid stem cellからB細胞への分化の選択的障害が示唆されたが原因は不明である。

6. 蛍光抗体直接法による皮膚血管病変の免疫学的考察

（皮膚科）

尾立 冬樹・菊池 りか・月本 厚美

昭和57年～60年2月における蛍光抗体直接法で得られた皮膚血管壁の陽性所見をまとめた。対象疾患は膠原病、血管炎、紫斑病などである。陽性疾患数は40例19疾患であった。C3が40名中34名（85%）と高率であり、IgG 10名（25%）、IgM 12名（30%）、Fibrinogen 6名（12.5%）、Clq 6名（12.5%）、IgA 1名であった。C3の高率出現が目されたためC3を中心に整理してみると、C3を含む複数陽性例は16名で免疫グロブリンとの出現が多く従来循環障害を基調とする疾患であり、免疫疾患とは見なされていないStasis dermatitisに陽性所見が見られたことが注目された。C3を除く陽性例は6名と少ない。すべて免疫疾患と考えられているものばかりであった。C3単独陽性を示した疾患は18例であった。前2群と比べるとこのなかにも免疫疾患とは見なされていない疾患に陽性所見がみられた。

7. ソバ粉によるアレルギー性食餌性蕁麻疹の1例（第2病院皮膚科）安田 和正・平野 京子

1. ソバ粉の摂食により蕁麻疹および喘息発作を生じ、接触塗布にても接触部位に蕁麻疹を作ることが出来る症例を報告した。

2. ソバ粉以外にも多種類の抗原に対して特異的IgE抗体を証明した。

3. これらの抗原のうち、イネ科植物種子、タデ科植物種子、ゴマ科植物種子、その他ジャガイモ、ニンニク、タマネギ、ピーナッツ間には共通抗原性の存在が

示唆されたが、吸入抗原との間には共通抗原の存在は認められなかった。

4. 同一蛋白量あたりソバ粉抗原は小麦粉抗原の約1,000倍の活性があり、open patch testはP-K反応の皮内注射による惹起に比べ、その感度が約1/10,000であった。

5. ソバ粉抗原は推定分子量12,500から25,000のトリプシンに抵抗性の糖蛋白と考えられた。

8. 皮膚筋炎の予後

（皮膚科）金子佳世子・菊池 りか・新井 洋子・肥田野 信

皮膚筋炎の予後について、全国の主な皮膚科151機関からのアンケートの結果を報告する。

皮膚筋炎患者において特に悪性腫瘍を予想しなければならない場合は、男では50歳以上、女では30歳以上、痒痒感を伴い、ヘリオトロフ紅斑が著明な場合で発病後1年以内は腫瘍の発現に注意しなければならないが、それ以後は神経質になる必要がないと思われる。

肺線維症を予想しなければならない場合はレイノー症状や関節痛が著明、悪性腫瘍の合併がない場合で、又、皮膚筋炎の発病後1年以内に発症した場合は予後が極めて悪いので臨床的に注意し肺線維症の早期発現に努める必要がある。生命に関する予後からいうと、膠原病の中では皮膚筋炎は最も予後不良といつてよいと思う。

9. HBワクチンに対する非応答性の免疫機構の解析

（消化器内科）

邱 世賢・山内 克己・中西 敏己・古川 隆二・長谷川 潔・橋本 悦子・久満 董樹・小幡 裕

HBワクチン20 μ gを4回接種しても血清中にanti-HBsを産生できない非応答者8名と血清中にanti-HBs陽性の対照群4名からHBワクチン接種2週間後と4週間後に末梢リンパ球を分離し、HBsAgとPWMの刺激でin vitro anti-HBs産生を検討した結果、(1)非応答者のリンパ球はpolyclonal immunoglobulinの産生に対照群との差はなかったが、anti-HBs産生能がほとんど認められなかった。(2)対照群と非応答者由来のT細胞とNT細胞を混合培養により、このような非応答性の免疫機構はワクチン接種2週間後においては主としてB細胞の機能欠損によるもので、4週間後は主としてHBsAg特異性のサブレッサーT細胞の存在によるものであることが考えられ

	IgG (γ)	IgA (α)	IgM (μ)	IgD (δ)	IgE (ϵ)	L-Lambda (λ)	L-Kappa (κ)
Sample (E \times 1000)	25	360	273	340	324	30	221
Control (E \times 1000)	385	385	385	340	340	385	211
阻害率 (%)	94.5	6.5	3.2	0.0	4.8	92.2	4.5

る。

10. 不活性 LDH 結合免疫グロブリンの免疫混合法による検索

(生化学) 佐々木 博・木下 忠雄・
堀川 博朗・降矢 熒

LDH 活性が0IU/l と全く活性が認められない H (B), M (A)-両 Subunit の失活症例の酵素結合免疫グロブリンの同定は、従来の発色中心とする方法では測定できない。そこで我々は、戸沢らの免疫混合法を一部改変して同定したのでその方法について報告する。

方法：免疫混合法によって免疫沈降物を得、それに LDH 活性が認められる（約500～600IU/l）血清を添加、一昼夜4℃に incubate する。後は同様に発色液を加えて LDH 測定を行ない、添加した血清の酵素活性の阻害率から結合免疫グロブリンを検出する。

結果並びに考察：測定結果は表に示した。

以上の阻害率から本試料は IgG (λ) 結合と推定した。この様に全く失活している試料においても同定できる利点がある。

11. 馬腎髄質外帯より高度に精製した Na, K-ATPase に対するモノクローナル抗体の性質

(生化学) 中尾 順子

Na, K-ATPase は Na-Pump の本体として重要な働きを有する細胞膜酵素であり、その作用のメカニズムについてはなお不明な点が多い。

抗体を用いたその分子レベルでの作用の解明のため、精製酵素を抗原としてモノクローナル抗体の作製を行なった。方法は Köhler と Milstein に従い7種の抗体を得た。その一つ M-80 と名付けた抗体について報告する。抗原への結合は RIA および ELISA により行ない、同時に Na, K-ATPase への阻害について検討した。サブユニットへの結合は Immunoblot を用いて検討し、イオン透過への作用は ^{86}Rb のとりこみに対する作用を人赤血球を用いて行なった。

結果：M-80は IgM であり、重量比約1：1で Na, K-ATPase 活性を50%阻害した。Na, K-ATPase の2つのサブユニットのうち α に結合し、赤血球のイオン

透過を外側より最高50%阻害した。

12. ラット馬杉腎炎における Ia 陽性細胞の動態と各種免疫抑制剤の効果について

(腎センター小児科)

川口 洋・伊藤 克己

目的：ヒトの糸球体腎炎や実験腎炎において、その発症および組織障害には免疫系の因子が示唆されている。今回我々は、ラット馬杉腎炎における糸球体内の免疫担当細胞の動態を観察し、また、各種の免疫抑制剤の影響を検討した。

方法：ラビット・抗ラット GBM 抗体を IV 投与し、ラット馬杉腎炎を作製した。Schaeinar らの方法は C. I. 68: 920 1983らの方法にて、単離糸球体内の Ia 陽性細胞と T細胞をモノクローナル抗体を使用し、観察・count した。免疫抑制剤として、M-PSL, Endoxan, Cyclosporin A を使用した。

結果：ラット馬杉腎炎の autologous phase においては、糸球体内 Ia 陽性細胞および T細胞数は、著明に増加していた。M-PSL, Endoxan 投与群は、20mg/kg/d I.P. 投与にてその減少がみられ、cyclosporin A では35mg/kg/d 投与にて効果がみられた。考按：ラット馬杉腎炎の増悪には Ia-T 細胞の関与が考えられた。

13. アミロイドーシス腎からの AL 蛋白の分離

(生化学) 伊東 栄子・降矢 熒

(第二病理) 豊田 充康・梶田 昭

アミロイドーシスは逆平行 β -板状構造を持つアミロイド物質が全身の臓器に沈着する代謝性疾患であり、AA, AL, AF 等に分類される。

今回、病理的に AL と思われるアミロイドーシスの剖検腎から、水抽出法で粗アミロイド蛋白を得、精製をゲル濾過法 (Sephadex G-100, Sephacryl S-300) で試みたが、夾雑物が多く純化できなかった。しかし、ゲル濾過で得られた第III画分のオクタローンによる検索で、 λ 型 AL 蛋白と同定された。又、SDS-電気泳動法、酵素抗体法を用いたところ、正常腎水抽出物では1本、アミロイドーシス腎水抽出物では2本の band が検出され、アミロイド蛋白のおおよその分子量は